

## 片マヒ自立研究会との出会い

佐藤 万宜

藁をも掴む思いで片マヒ自立研究会に参加したのは、1997年（平成9年）12月の第25回、健福センター（桜木町）での会合だった。

生活のため、何としても復職をせねば、の気持ちで、丹羽保健婦さんの紹介でおそろおそろ出席してみたら、「神長さんが富士山に登った」などとすごい話で驚いた。

復職分科会の江嶋さんの「求めよ、されば与えられん」の言葉に励まされ、何とか復職することができた。

会長や奥様のやさしい眼差し、大庭さん、三好さん、城所さん、山田さん、前田さんらの元気に、私の絶望が希望へと変わっていった。

片マヒ自立研究会との出会いは、うつむいて歩いていた私の顔をまっすぐにしてくれた。

世の中まだ捨てたものではないと、勇気を与えてくれた。

何より25回から100回まで75回も続いているということは、私に合った会だからに違いない。



100回を祝い、さらなる発展のため貢献できれば幸いである。

## 「障害受容」から「変容」への導き

長山 弘

### はじめに

平成14年6月27日、36年間の会社生活最後の日、私は株主総会出席への車の中で、脳梗塞で倒れた。

人生の途中で、「脳梗塞による障害」と「退職」とそれに伴う様々な課題に出会い、今まで経験したことのない精神的・肉体的な苦しみが、容赦なく襲いかかり、私という人間の精神的土台を根底から破壊して行った。

今まで幾多の苦難も乗り越えてきた経験も、思想も、粉々に砕かれて行った先に見つめた自信喪失と深い絶望感。

有史以来、人類社会はどれだけの進歩をして来たのであろうか。

ただ一つ、確かに科学のみは発達したと言えるであろう。

それは、科学研究に於いては先人の研究したことを学び、その研究の上に更に自分の研究をつぎ足し、更に次の人はその上につぎ足して行くという風にして発展させることが出来た為であろうと思う。

しかし、突然、人に現れる人生の壁や様々な人生の課題に対し、つぎ足しは出来ない。

各人は、それぞれ第一歩から始めなくてはならない。

いくら焦っても、他の人の経験や対処の上に次のものをつぎ足し、その次の人は更に何ものかを加えていくということは、不可能である。

人は、それぞれの生涯の中で、時期と形を変え、人生の行く手に立ち塞がる壁に出会う。かつて、「脳梗塞で倒れた人」のことも、身近にあった事柄であったにも拘わらず、私は人ごととして軽く扱ってきた。

私は、その壁の威力の凄まじさに打ち砕かれたのである。

このことは、時代や科学の進歩でも解決できない要素を持っている。

「障害受容」の先に「生きることへの肯定」即ち「新しい自分の再構築・変容」に至るまでには、深い、長い道のりがあることを知った4年間であった。私は、「弱りきった心を癒された者」としての「片マヒ自立研究会」との「出会い」を振り返ってみた。

## 1. 自主グループ

### 「片マヒ自立研究会」への参加

- ①『心が動く―脳卒中片マヒ者、心とからだ十五年』森山志郎著という1冊の書と偶然に出合った。
- ②そこには、障害と共に15年間生きて来られた現実と越えて来られた多くの課題と努力の道程が、丁寧に正直に語られ、加えて「障害と人生」に深い考察がなされていた。
- ③私は病気の不安、過去の清算、自分の弱さ、悩み全般のことを誰にも言えず耐えていた。
- ④私は、森山会長が主宰する「自主グループ・片マヒ自立研究会」へ参加した。
- ⑤自主グループで、発見したことは、そこでは、あまり努力しなくても、仲間の中ではお互いの気持ちがわかり合えることであった。
- ⑥「傷つける癒し人」と言われるが、傷ついた者同士がお互いに「相手を癒してく

れる」そんな立場があることを知った。

- ⑦色々な方面からの研究や討議の中に、互いが互いを必要としつつ支え合うという「出会い」があった。

## 2. 共感する他の種類の障害者との

### 新たなる「出会い」

- ①身体障害者の後遺症は、経験した者でなくてはわからない。
- ②障害による後遺症は大きな個人差があり、まして障害の種類が違う他の人の後遺症のことは、全くわからないのではないかと思う。
- ③しかし、「辛かったでしょうねえ。」  
「そんなに大変でしたか。」「わかるなあ。」という「共感の言葉に」心が癒され、多くの障害者の心がお互いに、自然に開いていくのであった。
- ④この病を得て、「バリアフリーの市民推進会議」や全国的「障害者タウンページ」という事業に関わることになった。  
健常者では経験したことの無い新たな世界が広がって行ったのである。

## 3. 「障害受容」から「変容」の世界へ

- 1) 発症以来4年を経過した。  
あれほど苦しんだ「障害受容の課題」も解決でき、「変容した新しい自分」を発見できた。
- 2) 「人が弱った心が癒されるということ」を長い間、見つめ続けて来たが、今は次のように感じている。
  - ①人が心の組み替えの体験は、深い苦悩と深刻な探求の果てに初めて起ることであると言われて来た。
  - ②しかし、「新しく生まれた自分」というものは、以前から自分の人格の中に既に埋蔵されていたものである。

③ 現象的な外界との表面的比較、自分の中にある理想と自分の現状との比較が「苦悩」の大きな原因でもある。

④ 自分の心を満杯にしている苦しみや悲しみを、会話や学びを通じて、洗いざらいに発散した時、心に空間が出来、既に埋蔵されている人格の別の光に気付いて行くのではないであろうか。

⑤ 新しい「出会い」というものは、他者から与えられるものと自分の納得できる真理の探求から見つけ出すものがある。

それは、個人の意志と努力、個人の思想、性格、環境などによって千差万別である。

⑥ 人は自分の決断と価値観によって生きている。

自分の人生は自分で決めるという願いと意志は、根本的な人間の本質である。心を開いて貰わない限り、真の対話や共通の学びは実現しない。つまり、「真の癒し」にとって重要な視点は、仲間が対話を望む状況を作り出すことが出来るかであると思う。その意味で、生きていく中で、人が人を救うことは出来ないが、人間は細田満和子先生の説く「生命・コミュニケーション・身体・家庭生活・社会生活の『生の5つの位相』の統合性を保ちながら生きるものである限り、自分も他者も別々に生きているのではなく、相互に影響しあい、支えあっているのであることを信じることであると思う。

⑦ 『環境は、自心の展開であるとも言われているが、現実の世界は、環境が「社会と人間」に「変革」を求めて来た。』と森山会長は語られた。

「苦しみや悩み」はそのような環境の

中で自分独自の本当の価値を見出すまでの道程であると考える。

⑧ 人は、価値ある人生の創造を求め続けている。

その為に、家族を含め、より多くの人々の幸福な未来を願い、そこに自分を役立てたいという思いが多くの人々の「生」を支えて来たのだと思う。

その願いを共有できた時、「人の心を癒すこと」に繋がっていくのであろうと思う。

⑨ 「思想との出会い」と「自己変革」

私の体験で、「癒された者として」の「障害受容」の先に存在した「変容」が出来たのは、「多くの人との出会い」「精神対話士の学びとの出会い」「深い思想と学問との出会い」そして、「障害者の自主グループの存在」であった。そこには、いつも深い人間観に基づいた指導者の存在があった。最終的には、どのような思想と「出会い」、既に自らの中に存在する「新しい自分」と出会うことが出来るかが、即ち自己変革であると思うに至った。

戻る